

第三章

一 善人 副詞・猶・尚 なお(ほ) もちて もて 往生 遂 をとぐ、
いわ(ほ) 況むや ん(む) いふ(四・未然) + む十や(反語) や 悪人 間投助詞十係助詞 をや。

なおよら。いつそ

いうまでもなく、まして 漢文訓詁表現いわんや…においてをや… …においてはなおさらである

然 ラ変・体 接助 常 副詞 副詞 しかる 常 を、世 常 のひと 常 つねに 常 いわく、悪人 常 なお(ほ) 往生 常 す、いか 常 に 常 いわんや 常 善人 常 をや。
そうであるのに、ところが いつも、始終、よく

断定・用 似

完了

この条、一旦 断定・用 似 その 断定・用 似 いわ(ほ) 断定・用 似 ある 断定・用 似 に 断定・用 似 たれ 断定・用 似 ども、本願他力の 断定・用 似 意趣 断定・用 似 に 断定・用 似 そむけ 断定・用 似 り。

悪 ひとまず、一応 第十八願 ゆいじよこぎやく 唯除五逆 ひほうしようほう 誹謗正法

五逆 小乘 殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血。大乘 寺塔を壊し経蔵を焼き三宝の財物を盗む。仏教を誹り、聖教を

粗末にする。僧侶を罵り責め使う。小乗の五逆。因果の道理を信ぜず十不善業をなす。

十悪・十善 はいあくしゆうぜん 廃悪修善の行 悪(因)↓苦(果) 善(因)↓楽 ぼつくとらく 拔苦与楽

身 殺生・偷盗 殺生・偷盗 口 綺語・悪口・両舌・妄語 意 貪欲・瞋恚・愚癡 慢 邪慳驕慢

○阿闍世王 あじやせ 觀經 提婆 提婆 (法華經) と共に頻婆娑羅王を殺害、母・韋提希夫人を幽閉↓釈尊に帰依 (涅槃經)、月愛三昧

○山伏弁円 『御伝鈔』 弁円濟度 「あだとなる弓矢も今はひきかえて西へいるさの山の端の月」

御文 「五逆十悪のわれら」 「五障三従の女人」 御文四帖3

善・悪 悪 『正信偈』 p四、十一、十二、十三、二十五、二十六、二十九、三十、三十一、三十二

そのゆえ(ゑ)は、自力作善の人は、ひとえ(へ)に他力をたのむ ころ かけたる あい(ひ)だ、

※観經 九品往生

偏に まったく

頼む・悪む

欠け

隔たり・すき間・くなので

弥陀の本願に **あらず。**

断定・用 ラ変・未 打消・終止

ラ変・已然

接助

しかれども、自力のころを **ひるがえ(へ)して、** 他力をたのみ **たてまつれば、** 真実報土の

四段・連用

接助

四・用

四・已

しかあれ

翻し

奉れ 謙讓

往生を **とぐる** なり。

下二・体

断定・終止

※小谷信千代『誤解された親鸞の往生論』巴陵、広瀬、山の端の月(はるかに照らせ、西へいるさの)、安部屋

※ 遂ぐる

煩惱具足のわれらは、 **いず(づ)れの行にても、** 生死をはなるる **ことある** べからざるを

代名

代

格接

一係

下二・体

ラ変・体 当然・未 打消・体

「じ」接尾語

にて、おいても

※苦

離れる

名

四・用

四・体

断定・已

あわ(は)れみ **たまい(ひ)て、** 願をおこし **たまう(ふ)** 本意、悪人成仏のため **なれば、**

憐れみ 同情・いとしい・ふびん、ものあはれ

他力を **たのみ** **たてまつる** 悪人、 **もつとも** 往生の **正因** なり。

四・体

副詞

断定・終止

接

副助

係助

サ変・已

副詞

係助

下二・用

四・用

過去・終止

よって **善人** **だに** **こそ** 往生 **すれ、** **まして** 悪人は **と、** **おお(ほ)せ** **そ(さ)うらい(ひ)** **き。**

結び「すれ」

いうまでもなく

むみょう

補助動詞

「けり」

煩惱具足 何か欠けていても、煩惱は欠けていない。 **無明**

二而不二 大乘の基本理念

※和 まじか

絶対矛盾的自己同一―西田幾多郎、 無分別の分別―大拙 雨↓天気、 日々是好

日

淨穢不二(源信僧都エピソード)

因果不二 機法一体 生死即涅槃 能所不二 往還一致 煩惱即菩提

義なきを義

「唯一」悪人正機